

## 第 62 回例会「公演資料の収集と整理～演奏会プログラムの データベース構築にむけて」・総会報告

### 【目次】

支部長就任にあたって	伊東辰彦	1
第 62 回例会・シンポジウム「公演資料の収集と整理」 基調報告「音楽情報資源としてのコンサート・プ ログラム」	林淑姫	2
演劇資料の整理と公開	児玉竜一	3
公演資料の収集と整理—日本近代音楽館の場合	森本美恵子	5
東京文化会館プログラム収集の概要	遠藤淑恵、永井靖子	6
コンサート・プログラムの書誌情報を MARC フォーマットに乗せる試み	鳥海恵司	7
IMS-RILM 報告	伊東辰彦	9
2017 年支部総会報告		11
「若手・中堅検討会」活動報告・今後の活動について	久保絵里麻、伊東辰彦	16
訃報 上法茂氏	藤堂雍子	16
事務局だより		17

### 支部長就任にあたって

伊東 辰彦

今年より 3 年間、荒川恒子氏の後を受けて支部長に選出されました。過去 3 年間にも役員を務めさせて頂きましたが、丁度、本務校の教養学部長の任にあったため、大学運営業務に追われ、自分としては十分なお手伝いが出来なかったと感じております。今年度よりその職責から解放されましたので、会員の皆さんの付託にお

応えすべく、精一杯その任に励む所存です。

私自身は図書館学の専門家ではありませんが、日本の大学時代、海外の大学院時代に各地の様々な図書館を利用し、その恩恵に深く浴してきました。その時々研究上の支援をして下さった優れた図書館員の方々のご恩に報いるべく、この職務に真摯に向き合いたいと思っております。特に、音楽図書館の更なる国際化という課題に、皆さんと共に取り組んで参りたいと思っておりますので、ご指導、ご鞭撻のほど、どうぞ宜しくお願い申し上げます。

(いとう たつひこ)

### 【第 62 回例会】

#### シンポジウム

「公演資料の収集と整理～演奏会プログラムのデータベース構築にむけて」

第 62 回例会は演奏会プログラムの収集と整理法に焦点をあてた。演奏会プログラムをはじめとする公演資料は一般的には図書館資料として収集されることの少ない資料である。ある演奏会のために用意されたプログラムは一枚ものであったり冊子であったりと形状はさまざまだが、総じて会が終われば忘れられ、捨てられてしまう一時的な印刷物（エフェメラ Ephemera）とされ、図書館蔵書として認知されてこなかつ

た。音楽図書館蔵書は書籍、楽譜、雑誌、視聴覚資料によって構成されるのが通常だからである。しかし、演奏会が音楽文化のもっとも大きな部分のひとつを占めていることを考えれば、どの楽曲がいつ、誰によって、どこで演奏されたかを示すプログラムは、音楽情報資源として歴史的に重要な資料であり、近代音楽史を語る一級の史料でもある。

公演資料は、演劇の分野で歌舞伎資料、近代演劇資料などのコア的存在としてその収集と整理が積極的に進められており、また世界に眼を転ずれば、イギリスの Concert Programme Project (CPP) の活発な運動に見られるように、主要な図書館・資料館では多くのプログラム・コレクションが存在し、整理が進められている。他方、日本の多くの音楽図書館では資料的価値を漠然と理解しつつも、積極的な収集やシステムティックな整理に踏込めない状況にある。

今回のシンポジウムは演奏会プログラム収集の意義について共通理解を深めること、およびその整理法—データベース構築の枠組みについて具体的に検討することを主旨とした。このテーマへの取組みは本例会が最初である。

パネリストに早稲田大学演劇博物館副館長児玉竜一氏、明治学院大学日本近代音楽館森本美恵子氏、東京文化会館遠藤淑恵氏、永井靖子氏、(株)トッカータ鳥海恵司氏を迎えて開催された。2017年6月3日(土)、東京音楽大学付属図書館。(コーディネータ・司会 林淑姫)

## 基調報告「音楽情報資源としての コンサート・プログラム」

林 淑 姫

名著 *The Book of World-Famous Music*  
の著者であり、演奏会資料の膨大なコレク

ションでも知られる J. ファルド James J. Fuld (1916-2008) はかつて、「音楽のエフェメラープログラム、ポスター、チケット、ちらし、広告など一は演奏史を描く重要な資料である。にもかかわらず、それらは音楽図書館において正当な位置を確立しているとはいえない。積極的な収集はされず、たとえ幸運にも図書館がそれらを受入れたとしても十分な整理保存、目録はなされていない」と指摘したことがある<sup>註</sup>。35年も前の発言だが、思い返してみれば、演奏会プログラムは多くの場合、書籍などとともに図書館に寄贈され、書籍は整理されて書棚に配置されるが、残りは箱詰め運び込まれた当時から開かれることなく書庫の片隅に眠っている。音楽図書館の蔵書は通常、音楽書、楽譜、雑誌、視聴覚資料で構成され、プログラムは依然として「雑資料」の範疇と見做されているからである。

演奏会プログラムはファルドが言うように、重要な歴史資料である。創作、演奏、聴衆論を基盤とする近代音楽史研究にとって、どの楽曲がいつ、どこで、誰によって、どのような環境のもとで演奏されたかを如実に語る演奏会資料は一次資料として是非とも参照されなければならない、というようなことは図書館の外では既に承認済みである。研究者は目当ての資料を求めて捜しまわり、古書店のカタログには時にびっくりするような高値で載る。箱は開かれなければならない。

ファルドの指摘と提唱は書庫に眠る演奏会プログラムを見直す契機となった。1981年の IAML ケンブリッジ大会におけるシンポジウム "Programme Collections and Their Organization" (*Fontes Artis Musicae*, 28/1-2, 1981) で検討され、イギリスに Concert Programme Project (CPP) が発足したのは2003年のことである。同プロジェクトによって構築された共同データベースは現在インターネット上で公開され、世界各地からのアクセスに供されている (<http://www.concertprogrammes.org.uk/>)。

このデータベースはイギリスとアイルランドの図書館のプログラム・コレクションを横断するインヴェントリーである。個々のプログラムのユニオン・カタログというよりは、どこにどのようなプログラム・コレクションがあるかということ優先させるが、作曲家、作品、演奏者、シリーズ、主催者、場所などの検索を可能にしているから、各機関は所有するコレクションの解題とともに個々のプログラムのデータ化を行うことが前提である。

日本における試みは数少ないがまったくの白紙というわけではない。東京文化会館の1961年開館以来の公演プログラム・データベース、日本近代音楽館の創設時からの明確な収書方針とその成果、関西における大阪音楽大学音楽博物館（現・同学音楽メディアセンター楽器資料館）の努力などは資料への適正な視点を示すものである。これらの先駆的事業を基礎として、今後加えられる努力の成果を総合的に検索できるシステムを作ることはできないか。そのため有効な目録法はどのようなものであるべきか。

プログラムは作品と演奏に関わる事項ばかりでなく、楽曲解説、作曲家や演奏家のプロフィール、エッセイなどを収載した多面的な資料でもある。プログラムの目録は演奏情報に限られるか（CPP）、あるいは図書に準じて目録されるために演奏情報はカットされるか（国立国会図書館）のいずれかである。これを統合する新たな方法も併せて検討されるべきである。端的に云えば、それを最新の目録標準規則 RDA (Resource Description and Access) に見出せるだろうか。そして、あちこちの書庫の片隅で沈黙している資料を甦らせるための音楽図書館間の共同作業は可能か。課題は多いが、私たちは今新たな出発点に立っている。

註】 Fuld, James. Music Programs and Posters: the

Need for Inventory. *Notes*, 37/3 (1981), pp. 520-32.

ファルドの著書 *The Book of World-Famous Music* は1966年初版刊行以来版を重ね、2000年に最新版（5版）がニューヨークのDover社から出版されている。ファルドの没後、彼のコレクションはニューヨークのMorgan Libraryに寄贈された。

（りんしゅくき）

### Concert Programme Project (CPP)



A database of collections of concert programmes held in European libraries, archives and museums: a resource for the history of musical life from the eighteenth century to the present day (<http://www.concertprogrammes.org.uk/>)

### 演劇資料の整理と公開

児玉 竜一

（早稲田大学坪内博士記念演劇博物館副館長）

早稲田大学演劇博物館（以下、「演博」）の事例を中心に、演劇資料の整理と公開の現況についてご紹介したい。

1928年に創設された演博は、坪内逍遙が掲げた方針によって古今東西のあらゆる演劇資料を収集しているが、重点的に資料が集まる分野は自ずから形成される。演博の場合、歌舞伎・音楽と、近代日本演劇というあたりが中心となる。

近世（江戸時代）、近代、そして現代。この年代の資料のありがたくも、困った特長は、資料



児玉竜一氏

が多く残りすぎていることである。近世演劇（歌舞伎と文楽）の研究史においては、1970年代から80年代にかけての20年近くを「資料整理の時代」と呼称していたほどである（諸資料の連関と特色については、赤間亮編『江戸の演劇書』参照）。この時代の資料公開は、整理・調査から翻刻、刊行がゴールであった。科研費によって招集されたチームによって大きく整理がなされ、やがて刊行チームの結成、共同作業という流れによって、『歌舞伎評判記集成』第一期（1972～1977／岩波書店）、同・第二期（1987～1995／岩波書店）、『歌舞伎台帳集成』（1983～2003／勉誠社）、『義太夫年表』（1979～1990／八木書店）といった代表的な偉業は完遂された。

残る大きな領域としては、歌舞伎の上演情報の一次資料「番付」がある。国内諸機関に所蔵されている番付の整理と目録化は、大阪府立図書館（1968・1970）、大阪女子大学（1981）、池田文庫（1981～1990）を経て、国内最大級の点数を有する演博（1992～1994）が続く形となった。付属CD-ROMに番付の画像を収めた目録は東京大学文学部国文学研究室（2000）が早く、2004年に日本大学総合学術センター所蔵のものがDVD版「歌舞伎番付集成」となって発売された。ところがウィンドウズがビスタに切り替わると不具合を生じることが判明、戦前の演劇研究者黒木勘蔵のコレクションをデジタル公開した「電子版黒木文庫」（2006／東京大学教養学部）も

相まって、公開の大勢はネット上に移った。石川県立図書館「金沢の芝居番付」のように、かつて紙媒体で影印刊行したものを、ネットで公開することにした事例も増えている。現在では演博もネット上で番付を公開しているが、試験公開（登録データ 54,213 / 登録画像 120,151）に留まっている。

以上のような番付研究の進展によって、1970年代まで「役割番付」に偏っていた上演データ採取は、「絵本番付」「辻番付」を含めた番付各種を総合的に参照して興行全体を押さえるという方法の確立を促した。とくに江戸の歌舞伎興行は、上演中の場面や演目の抜き差しが頻繁に行われ、そうした動向は番付各種の異同調査によって把握できることが明らかになったのである。こうした興行細部の状況把握は、役者絵研究を大きく進展させることにも繋がった。役者絵もまた、インターネット時代を迎えて大きく研究環境が変化した分野であり、従来はそれぞれの所蔵機関に秘匿されていた絵が、インターネットによって全世界的に閲覧できる環境が形成されつつある。2001年に役者絵をインターネット公開した演博は、登録画像数 47,515 で、役者絵に特化して言えば世界最大級となっている。いまや大英博物館やボストン美術館の浮世絵を自宅にいながらにして見ることが可能で、立命館アトリサーチセンターのような横断検索サイトも整えられようとしている。

演博ではデジタル・アーカイブとして、現在30のデータベースを運用しているが、「浮世絵」、「番付」と並んで大きな柱となっているのが、「演劇上演記録データベース」である。これは演博が所蔵する、近現代の演劇公演の筋書・ちらし・ポスター・半券などを登録することにより、上演記録を成しているものである。従って、初めから網羅性を企図したものであるというより、登録データ 96,604 件という数に支えられて、結果として、ある程度の網羅ができていくに過ぎない。著作権

等の関係もあり、画像公開は明治期を中心としたものに限っていて、登録画像数は16,038に留まっている。将来的にはこの画像数（筋書などは頁数に応じて、1件につき複数画像数となる）を上昇させるとともに、上演記録と上演写真データベースの連携などが求められてゆくこととなる。

（登録数は2017年現在）

（こだまりゆういち）

## 公演資料の収集と整理 —日本近代音楽館の場合—

森本 美恵子

（明治学院大学 遠山一行記念日本近代音楽館）

### I 資料収集について

遠山音楽図書館時代に始まった演奏会プログラムの収集は、日本近代音楽財団日本近代音楽館設立にあたって収書の柱のひとつに位置づけられ、方針が定められた。明治学院大学においてもその方針は受け継がれ、現在に至っている。

収集資料の領域（種別）は下記の通りである。

1. 日本国内で行われた演奏会、オペラ、ミュージカル、バレエ、能、歌舞伎、レコード・コンサートなどのパンフレット、カタログ、ポスター（原則としてポピュラー音楽、民族音楽は含まない）
2. 日本国内で行われた演劇公演のパンフレット、カタログ、ポスターのうち、音楽、作曲家について記載があり、必要と認められるもの
3. 日本で行われた音楽関係の講演会、演奏付き展覧会、音楽をテーマにした展覧会のパンフレット、カタログ、ポスターのうち、必要と認められるもの
4. 日本人の作品が演奏された、または日本人が出演している外国公演のパンフレット、カタロ

グ、ポスター

5. 上記原物を所蔵しない場合、代替物としてのコピー

6. 上記に付帯するちらし、チケット等

これらにおいても例外はあり、この領域規程自体、それを限定するというより方向性の提示ないしは指針としての役割を負うものである。また、収集年代は当館一般資料の収書範囲と同一であり、プログラムのみの規程はない。大まかに言えば、幕末・明治以降、現代に至るまでである。

当初は自然発生的に集まってきた演奏会資料も、日本近代音楽館の創設とともに組織的収集の対象となり、1988年、館報『日本近代音楽館』創刊号において、他の資料とともに収集への協力が呼びかけられた。その結果、個々人の温かいご協力に加え、オーケストラをはじめとする演奏団体やマネジメント事務所、音楽ホールなどから資料寄贈の申し出をいただき、現在、作曲家、演奏家、評論家などの記念文庫中のプログラムとともに、コレクションの重要な部分を形成している。数量的に多くはないが、演奏会場や古書店で購入する資料もあり、収集に際しては出版物とは別の視点や手段が必要となる場合が多い。2017年5月現在、資料数はおよそ75,000点である（重複を含む）。

### II 資料整理について

日本近代音楽館設立後、資料の管理方法も見直され、1987年よりプログラム、ポスターの原簿登録を開始した。資料原簿は手書き記入、ワープロ入力を経て2001年に市販データベースソフトを導入、データベース化された。2017年5月現在、登録データ数は34,461件である。

原簿記載項目は下記のとおりである。

請求記号

演奏日

演奏会名（資料名）  
 文庫・コレクション名  
 受入種別（価格兼用）  
 受入先  
 受入日  
 備考  
 日付等の根拠  
 作業用のメモ等

2002 年、プログラム原簿から項目の一部を切り取って利用者用検索画面を構成し、館内利用者端末において公開を開始した。資料原簿データに基づくため書誌データとして不十分ではあるが、それでも公開したほうがよい、との結論に至ったのは、原簿登録数が増加したこと、原簿記載項目中、特に演奏日については詳細な調査を経て判明する事例が多く、利用者にとっても有用であろうと思われたこと、何より同種のコレクションを有する機関が少なかったことによる。2017 年 5 月現在、利用者端末登録データ数は 27,036 件である。

利用者用検索項目は下記のとおりである。

請求記号  
 演奏日  
 演奏会名（資料名）  
 文庫・コレクション名  
 備考

### III 今後の課題

さまざまな検索に応えるためには、書誌データを充実させ、検索用データ項目を拡充する必要があるだろう。また、利便性を高めるため、データベース内同一書誌の統合を図りたい。さらに、現在、別に整理されている記念文庫内資料のデータをプログラム・データベースに統合する（または連結する）ため、検討をすすめている。

（もりもと みえこ）

## 東京文化会館プログラム収集の概要

遠藤 淑恵、永井 靖子  
 （東京文化会館音楽資料室）

### はじめに

東京文化会館は、「東京に本格的な音楽ホールを」という声にこたえ、開都 500 年事業として建設された施設である。オペラやバレエ、オーケストラの公演が行われる大ホールとリサイタルや室内楽のコンサートが中心の小ホールがあり、1961 年 4 月の開館から現在まで、さまざまな音楽家の演奏の舞台として利用されている。

会館 4 階にある音楽資料室では、これまでに大小ホールで行われた公演のプログラムを収集・保存し、閲覧やレファレンス・サービスに利用している。

### 公演プログラムの収集と保存

公演プログラムは主催者から 2 部提出してもらい、それぞれ閲覧用と保存用としている。開館当初のものはプログラムのみだが、1982 年からは当日の入場者数、出演者変更や曲目変更の有無、アンコール曲などを所定の用紙に記入した公演記録の提出も求めており、閲覧用プログラムと共に保管している。公演記録は事前に作成される公演プログラムからはわからない情報を得ることができる重要な資料となっている。過去の公演情報は、2011 年 5 月に公開された「東京文化会館アーカイブ」（下記参照）で検索が可能である。

閲覧用プログラムは市販のポケットファイルにファイリングして音楽資料室内の書庫で保管し、利用者の請求に応じて出納する。毎年一定数が確実に増えていくが、書庫スペースには限りがあるため、今後のプログラム収納について

頭を悩ませる日々である。

利用状況は年間 200 ～ 300 冊、月平均 20 冊程度閲覧されている。すべて館内利用のみで、館外貸出は行っていない。

#### 東京文化会館アーカイブ

東京文化会館アーカイブ (<http://i.t-bunka.jp>) は、東京文化会館の大小ホール全公演情報のデータベースである。2011 年の開館 50 周年事業のひとつとして採択され実現した。当初数社の見積もりでは金額が折り合わず、当時指定管理共同体を組んでいた株式会社 NHK アートに委託した。著作権の問題等で表紙画像のみデジタル化し、公演情報の部分は過去の公演プログラムを手入力した。データ更新はホール担当が公演情報から流用して行っている。公演日や演目、人名などから検索が可能で、利用件数は 1 日平均して 300 件前後、年間では 10 万から 20 万件で推移している。

アーカイブの公開により、レファレンス・サービスは飛躍的に便利になった。利用者からの問い合わせでは「昔見た公演の内容が知りたい」というものがよくあるが、正確な日付が不明な場合も多い。かつてはスケジュール表を一件ずつ確認する必要があり、非常に時間がかかったが、現在は短時間で回答できるようになった。

#### おわりに

東京文化会館は、1980 年代に各音楽ホールが建設されるまで内外の音楽家の主要な公演の舞台となっており、公演プログラムは 20 世紀後半の西洋音楽受容史の記録としても重要なツールであると言える。

音楽資料室では近年、東京文化会館アーカイブ以外にも目録や各種情報公開、SNS 等、ウェブ環境を利用した図書館サービスに注力している。これらのサービスを通じて資料を必要としている人に公演プログラムの存在が伝わり、調

査研究に役立ててもらえるよう、より効果的な情報発信の仕方を考えていくことが今後の課題である。

(えんどう よしえ、ながい やすこ)

#### コンサート・プログラムの書誌情報を MARC フォーマットに乗せる試み

鳥海 恵司  
(株式会社トッカータ)

#### はじめに

コーディネータの林さんから頂いた今回のミッションは、コンサートで聴衆に配られるプログラムの、書誌レコードとしての理想形を示せ... というもので、サンプルを作れば良いとのことなので深く考えずにお引き受けしたのだが... そもそも、このような短命で一時的な印刷物を目録作業で扱った経験などなく、個人的にも興味深い体験となった。

ところで書誌レコードのサンプルは?... と慌てて家探した結果、幸運にも数点見付き、その中から一番簡単そうな「マタイ受難曲」のプログラムを選んだ(表紙の画像: 2014 年 4 月 19 日、彩の国さいたま芸術劇場で行われた鈴木雅明指揮バッハ・コレギウム・ジャパンによるバッハ《マタイ受難曲》の公演プログラム)。



#### 分析

キャリア: 現在までは、ほぼ全て紙に文字を

印刷した冊子またはシート（近い将来、電子媒体も現れると予想される）である。

内容：(1) 演奏者、(2) 演奏される作品名、(3) 場所と日時、(4) 主催者、(5) コンサートそのものの題名。

なお(1)には演奏者の紹介文が、(2)には作品の解説文が付属していることが多い。

#### 書誌記述

形態的な特性から、一般的な図書と同様の書誌レコードを作成可能である。コンテンツは全体として二次情報であるが、演奏者・作曲者の経歴などの伝記的情報、作品解説や歌詞・台本などの一次情報を含むことがある。これらはアクセス・ポイントのタイプや選択に影響を及ぼす。

#### アクセス・ポイント（記述目録）

著者・作曲者などの著作責任に関するものは少なく、解説・紹介文の執筆者、台本や詩そのものを含む場合に、それらの作者、プログラムの構成・編集に責任を持つと推定されるコンサートの主催者などがある。サンプルでは、Isoyama, Tadashi（作品解説）；Picander, 1700-1764（台本作者）；Suzuki, Masaaki, 1954-（翻訳者）；Saitama-ken Geijutsu Bunka Shinkō Zaidan（主催者）の4つが与えられている。

#### アクセス・ポイント（主題目録）

全体としては二次資料であるため、当日舞台上で演奏・演技する個人・団体、演目の作品は主題目録の対象である。Bach, Johann Sebastian, 1685-1750. Matthäuspassion（タイトル件名標目）；Suzuki, Masaaki, 1954-；Morrison, Hannah…；Bach Collegium Japan（指揮者・歌手・演奏団体）；Concert programs—Japan—Saitama-shi（プログラムに対する地理区分付き件名標目）；Oratorios—Librettos

（台本に対する件名標目）；Oratorios—Analysis, appreciation；Passion music—Analysis, appreciation（作品解説に対する件名標目）；Concert programs；Librettos（プログラムと台本に対するジャンル用語）

#### 場所と日付のアクセス・ポイント

イベント（出来事）そのものに対するファクト・データで、UNIMARCの方式を紹介する。UNIMARCでは場所のデータを階層的に分析する。(a) 国；(b) 州または県；(c) 中間の行政区域；(d) 市町村；(e) 開催場所・施設・都市空間・乗り物などに区分し、これに(f) 日付が加わる。サンプルの書誌レコードでは「\$aJapan = 日本 \$bSaitama-ken = 埼玉県 \$dSaitama-shi = さいたま市 \$eSaitama Arts Theater Concert Hall = 彩の国さいたま芸術劇場音楽ホール \$f20140419」のように入力された。

（とりうみけいじ）



例会参加者の様子

シンポジウムを終えて

林 淑 姫

公演資料の史的価値に早くから着目していた分野は演劇である。早稲田大学演劇博物館の紹介と報告の背後には、それらを研究に必須な史料として重視してきた演劇研究の歴史の重み

がある。資料の収集は研究者が育成するものである。音楽図書館が公演資料の収集と整理の必要性について一定の理解を示しながらも積極的に関われない最大要因は、図書館蔵書として公認されていないことにある。未公認では整理計画も立たない。研究の側からの働きかけが必要とされるだろう。

明確な収書方針のもとに活動してきた機関に東京文化会館と日本近代音楽館がある。東京文化会館では、1961年開館時より、ホール使用者に対してプログラムとともに公演当日の記録（入場者数、演奏者、曲目等の変更およびアンコール曲など）の提出を求めており、進行中の全公演プログラム25,000点のデータベースにこの記録も含めているという。プログラムは一次資料だが公演以前に作成されたものである。その後の実際の記録が情報の質を決定する。そうした観点のもとに構築されたデータベースは注目される。日本近代音楽館（1987年創立）のコレクションは、明治期以降の公演資料およそ75,000点からなる日本唯一の総合的プログラム・コレクションである。歴史史料としてのプログラムに早くから注目してきた。少なからず見られる複本に、聴衆による当日のデータの書入りを重視する観点をここでも見出す。同館の課題は本格的な目録化（特別コレクション内資料を含む）である。



フロアからの発言

（株）トッカータの鳥海恵司氏が試作した目録実例は、資料記述と演奏情報を併せた目録が可能であることを立証したが、実際に運用する際には項目選択等の検討が必要となるだろう。他の機関と重複することの多いプログラム資料の目録化は図書館間の共同作業として行うことが効率的である。フロアの桐朋学園大学附属図書館、東京音楽大学付属図書館より、大学および関係者を中心とする演奏会プログラムの収集と整理に着手していることが報告された。そのような状況に応える意味でも共同データベース構築に対する早期の取り組みが望まれる。

---

## IMS – RILM 報告

伊東 辰彦  
（国際基督教大学）

去る2017年3月19 – 23日に、東京芸術大学を会場として、国際音楽学会（International Musicological Society）のアジアにおける初の大会が開催された。毎回の世界大会がそうであるように、今回も、いわゆる4Rs（RISM, RILM, RidIM, RIPM）の合同集会や、それぞれの研究集会が行われ、RILMに関しては、3月20日の午後2時から3時半まで“Collaboration and Dialogue: RILM in Japan”が、同日午後4時から5時半まで“Transcending Borders: RILM and Musicology in the Twenty-First Century”が開かれた。RILMの研究集会には、ニューヨーク本部からバーバラ・D・マッケンジー氏（Editor-in-Chief, RILM; President, IAML）とズドラヴコ・ブラゼコヴィッチ氏（Executive Editor, RILM）が来日され、その他にもティナ・フルーハウフ氏（RILM）やローレンツ・リュットケン氏（MGG Online）も加わっていた。私はブラゼコヴィッ

チ氏の委嘱を受けて、RILM 日本支部長として、前半のセッションに出席し、“RILM Japan: Its History and Mission” というタイトルで発表した。日本からは、私以外に小塩さとみ氏（宮城教育大学）と川本聡胤氏（フェリス女学院大学）にも私からの依頼で加わって頂き、それぞれ、日本音楽の資料関係、日本のポピュラー音楽資料関係についての報告をお願いした。会場には、RILM 日本事務局長の関根敏子氏、元 IAML 日本支部長の金澤正剛氏、前 IAML 日本支部長の荒川恒子氏ほか、日本や海外からの RILM あるいは IAML 関係者が参加していた（*The 20th Congress of the International Musicological Society, Tokyo 2017, Program and Abstracts*, pp. 17, 33 and 396-97 参照）。

私の発表の中では、RILM 日本支部の歴史の概略（2017年に創立 50 周年を迎えた）、何度かの経済的危機、それらを克服して来た意味、音楽資料を取り巻く環境の変化、文献収集の努力と公表のジレンマ、そして将来への展望について述べたが、全体として感じたのは、こうした事実が日本国外では殆ど知られていない事、そして、日本国内でも知る人が少なくなっているという事であった。その意味では、RILM 日本支部のこれまでの活動の意義を再確認し、将来の方向性を考えて行く上で、大変良い機会になったと思っている。

今後も構造的な赤字を減らす方法を模索しつつ、日本の文献を海外に紹介するという使命を果たしながら、海外からの要望に応えると同時に、海外で出版された日本音楽に関する研究を積極的に日本国内で公開して行く可能性も話題になった。また、ウェブ化による公開にはウェブマスターの存在が必要であり、そのための人件費が大きい為、どの時点で全面的なウェブ化に踏み切るかは今後の大きな課題であることも確認された。さらに、アマゾン、エブスコ、各種 E-journal、CiNii などの検索機能が普遍的に存在し、誰でも簡単に使える状況が日常化している中で、RILM の存在の意味が変化している事も確か

であり、また、学問としての音楽学の範囲も大きく広がって内容も変化して来ている結果として、収録にあたって学問的正当性がどこまで要求されるべきかという点も今後議論されなければならないだろう。

現実的問題として、文献を集めるためには経費がかかると同時に、集めれば集めるだけ、それを公表するための経費も増大するという構造的な問題がある。さらに、日本の音楽資料については、日本語のローマ字化による同音異義語の問題や英訳のためのコストの増大（小塩氏の指摘）、日本のポピュラー音楽関係の文献資料が十分に拾い切れていない現状（川本氏の指摘）を改善する必要がある。また、国内版目録の冊子体による発行を継続するかどうかという点は、経費節減の観点から毎回出る話題ではあるが、イタリアやブラジルでも国内向けの冊子が発行されていることは意外であった。何れにせよ、そうした作業のかなりの部分がボランティアとして行われている問題は、RILM 日本支部の活動を今後も継続的に維持して行く上で、いずれは解決しなければならない点であろう。



セッションの様子

今回の会議で最終的に確認されたのは、やはり何と言っても各国の現状の共有の必要性和相互の協力の重要性である。2015 年から 2016 年にかけて、デジタル化された資料検索システムが RILM を中心として公開され、世界の各国が協力して、世界の音楽に関する資料の収集、検索の新たな展開が可能になったことがマッ

ンジー氏によって報告された ("New Networks of Music Literature: RILM in the Twenty-First Century," 前掲書、p. 392 参照)。これによって、アジアの音楽伝統の重要性が世界的にさらに認識され、その理解と普及の更なる必要性が高まって行くだらう。そのことは、フルーハウフ氏の発表の中でも "In years to come RILM seeks to establish an ever stronger representation of Asian musicology" (前掲書、p. 397) と指摘されているところである。

国際本部からも高い評価を受けている RILM 日本支部ではあるが、今後も日本独自の研究、海外に伝えるべき内容を積極的に収集して行くことが必要であり、そうした研究の数は年々増えていくと思われる。近年はポピュラー関係の文献数も増え続けており、博士論文も出ている一方で、ビジュアル的な出版物も増えつつある。また将来は、全ての分野において、映像資料も収録する方向が考えられるであろう。何れにせよ、今後 RILM 日本支部が、国際本部や各国の支部とどのように連携を取り合って行けるかが重要な課題であり、さらに、IAML も含めて、アジア各国の関係者が協力して、アジアの音楽資料の重要性を積極的に発信して行く事が問われているのではなかろうか。

(いとう たつひこ)



(Music and Literature by W. M. Harnett. [https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Music\\_and\\_Literature\\_William\\_Michael\\_Harnett.jpeg](https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Music_and_Literature_William_Michael_Harnett.jpeg))

## 国際音楽資料情報協会 (IAML) 日本支部 2017年総会議事録

日時：2017年6月3日(土)午後1時～2時

会場：東京音楽大学付属図書館5F

出席者：荒川恒子、伊東辰彦、稲葉良太、小倉洋子、岸本宏子、工藤哲朗、久保絵里麻、栗林あかね、佐々木勉、田島克実、藤堂雍子、鳥海恵司、長谷川由美子、平岩寧、宮崎晴代、森立子、山本宗由、林淑姫、アカデミア・ミュージック株式会社、東京音楽大学付属図書館、桐朋学園大学附属図書館、株式会社トッカータ  
委任状提出(23)：伊藤真理、植田栄子、金井喜一郎、加藤信哉、加納マリ、佐藤みどり、嶋田弘美、杉野美緒、土田英三郎、寺本まり子、中山真衣、樋口隆一、正木光江、村井範子、柳原和音、大和紘子、エリザベト音楽大学附属図書館、大阪芸術大学図書館、国立音楽大学附属図書館、昭和音楽大学附属図書館、同朋大学・名古屋音楽大学図書館、民音音楽博物館、明治学院大学図書館付属遠山一行記念日本近代音楽館

会員総数(2017年5月末現在)：73(個人会員56、団体会員17)

I 開会挨拶 荒川恒子支部長

II 議長選出 佐々木勉氏

III 総会成立の確認

出席者22名、委任状提出23、合計54。

会員総数73の過半数に達し、総会成立

IV 報告

会員の移動(2017.6.3現在)

入会：鳥海恵司氏、宮崎晴代氏、工藤哲朗氏、

久保絵里麻氏、佐藤仁美氏、杉野美緒氏、柳澤健太郎氏、森立子氏、アカデミア・ミュージック株式会社、株式会社トゥッカータ

退会：天野裕介氏、関根和江氏、青木香子氏、寺本圭佑氏、細田勉氏、三田智子氏、向井大策氏、米田かおり氏、フェリス女学院大学附属図書館<sup>註)</sup>

## V 議案審議

### 1. 2016 年活動報告 (資料①)

\* 会計監査を加藤信哉氏より平岩寧氏に変更  
【承認】

### 2. 2016 年会計決算報告並びに会計監査報告 (資料②) 【承認】

### 3. 2016 年活動計画 (資料①) 【承認】

### 4. 2017 年予算案 (資料③) 【承認】

### 5. リガ国際大会代表出席者 荒川恒子支部長 【承認】

### 6. 役員選挙 2017 報告・発表

選挙委員長 林淑姫

2017 年役員選挙は 3 月 17 日公示、候補者の推薦受付を経て、4 月 19 日より本選挙 (郵便)、5 月 10 日投票が締切られた。5 月 16 日に行なわれた開票の結果は次の通りである (数字は得票数)。投票総数 37 (無効投票 0) 投票率 50%。

支部長

伊東辰彦 23 次点 久保田慶一 14

副支部長

伊藤真理 11 次点 久保田慶一 8

事務局長

星野宏美 9 (辞退)

次点 藤堂雍子 8 (繰り上げ当選)

役員

田島克実 21

岸本宏子 20

久保絵里麻 15

宮崎晴代 13

次点 柳澤健太郎 10

なお、今回の選挙委員会は林委員長、田島克実委員、稲葉良太委員の 3 名によって運営された。

### 7. 新支部長挨拶および新役員人事

伊東辰彦新支部長より、会計担当・宮崎晴代氏、会計監査・平岩寧氏の選出が発表された。

【承認】

## VI 議長解任

## VII 閉会

### 【註と補足】

註) 総会後に退会を撤回、復帰された (6 月 30 日付)。

補足 1. 国際大会への代表出席者は通常報告事項である。しかし、本年は役員改選の年にあたり、選出されたばかりの新支部長に出席の予定はないこと、国際大会での報告文書は荒川前支部長が執筆し提出済みであることから、前支部長の出席をもとめ、特に承認事項とした。

補足 2. リガ大会参加助成について。当日総会終了後、栗林あかね氏より大会参加申請済みの申し入れがあった。行き違いが認められたため、旧役員と新支部長により急遽検討、6 月 3 日付で同氏への支給を決定した。

(文責・長谷川由美子)

## 資料①

## 2016年活動報告および2017年活動計画

	2016年活動報告	2017年活動計画(中間報告及び予定)
国際大会	ローマ国際大会 2016年7月3日-8日 出席者: 荒川恒子、伊藤真理、藤堂雍子、山本宗由、久保絵里麻、山田高誌、那須聡子 代表出席者: 荒川恒子	リガ国際大会 2017年6月18日-22日 出席者(予定): 荒川恒子、栗林あかね、藤堂雍子、山本宗由 代表出席者: 荒川恒子
総会	2016年6月18日(土) 場所: 東京音楽大学付属図書館	2017年6月3日(土) 場所: 東京音楽大学付属図書館
役員会	2016年3月18日(金)(東京文化会館応接室) 2016年6月9日(木)(東京文化会館応接室) 2016年11月6日(日)(東京芸術劇場)	2017年1月24日(火)(東京文化会館応接室) 2017年6月3日(土)(東京音楽大学付属図書館)
支部例会(研究例会)・集会	「若手・中堅会員による検討会」(仮称) 2016年1月30日(土)(昭和音楽大学付属図書館) 第60回研究例会 2016年6月18日(日)(東京音楽大学付属図書館) 1. 「国立国会図書館所蔵讃美歌目録(和書編)」作成の舞台裏 柳澤健太郎(国立国会図書館) 2. パネルディスカッション「IAML日本支部のこれからを考える～『若手・中堅会員による検討会』からの提案」 久保絵里麻、澤田宏美、山本宗由 第61回例会 2016年11月6日(日)東京芸術劇場 【発表】「音楽資源のためのジャンル / 形式用語マニユアル」出版の意義 鳥海恵司、田島克実 【報告】IAMLローマ大会参加報告 久保絵里麻、山本宗由 司会・金井喜一郎	第62回例会 2017年6月3日(土)(東京音楽大学付属図書館) シンポジウム「公演資料の収集と整理～演奏会プログラムのデータベース構築にむけて」 パネリスト・児玉竜一(早稲田大学演劇博物館)、森本美恵子(明治学院大学日本近代音楽館)、遠藤淑恵、永井靖子(東京文化会館)、鳥海恵司(株式会社トッカータ) 基調報告及び司会・林淑姫
ニューズレター	第56号 2016年2月10日 特集 IAML / IMS ニューヨーク大会「デジタル時代の音楽研究」 第57号 2016年5月25日 特集 IAML日本支部第59回研究例会 第58号 2016年9月30日 第60回研究例会・2016年総会報告	第59号 2017年1月30日 特集 IAMLローマ大会 第60号 2017年5月20日 美山良夫「南葵音楽文庫の和歌山県寄託をめぐって」 鳥海恵司「音楽資源のためのジャンル / 形式用語マニユアル」(第61回例会) その他 オンライン版 ISSN 取得、第60号より表示
ホームページ更新/ニューズレター掲載	ニューズレター掲載 No. 55 (1/16), No. 56 (2/26)、No. 57 (6/11), No. 58 (10/18) 2016/8/4 英語情報を逐次追加 2016/11/16 一時的に閲覧不能になった Web ページを復旧	ニューズレター掲載 No. 59(2/28), No.60(6/2) 2017/4/19 支部創設時に刊行された第1号(1979.6)を掲載
選挙		日本支部役員選挙2017実施 選挙期間 2017年3月17日～5月16日
その他	フォンテスへの最新ニュース提供 (2016年3月1日) 本部への会費送金 (2016年3月25日)	フォンテスへの最新ニュース提供 (2017年3月23日) 本部への会費送金 (2017年4月20日)

資料②

## 2016 年決算

IAML2016年決算12月31日

費 目	2016年度		予算決算差額	備考
	予算	決算		
前年度繰越:				
現金	23,296	23,296	0	
郵便局	785,897	785,897	0	
(内 会員会議参加補助基金)				¥327,000
銀行	359,618	359,618	0	
(小 計)	1,168,811	1,168,811	0	
収入:				
未収会費				
2015年以前				
個人	12,000	6,000	6,000	
団体	0	0	0	
会費2016年				
個人	0	144,000	-144,000	
団体	0	14,000	-14,000	
利息	30	26	4	
会費2017年				
個人	342,000	192,000	150,000	個人 57
団体	280,000	252,000	28,000	団体 20 → 19
雑収入	0	0	0	
(小 計)	634,030	608,026	26,004	
会員会議参加補助基金	0	0	0	
会員サポート・支部活動支援基金	60,000	55,000	5,000	
(収入小計)	694,030	663,026	31,004	
収入総額	1,862,841	1,831,837	31,004	
支出:				
本部宛会費送金	382,531	382,531	0	2990.40EURO/1EURO=127.92YEN
予備費	50,000	20,000	30,000	
経常経費:				
RILM分担金	80,000	80,000	0	
大会代表旅費	100,000	100,000	0	
ニューズレター	60,000	54,872	5,128	
会議費、例会費	30,000	12,620	17,380	
交通費	30,000	24,050	5,950	
通信費	60,000	60,827	-827	
消耗品費	60,000	33,592	26,408	
雑費	5,000	3,796	1,204	
アルバイト代	10,000	0	10,000	
HP運営費	25,000	49,766	-24,766	
(経常経費小計)	460,000	419,523	40,477	
会員会議参加補助基金	100,000	100,000	0	
支出総額	992,531	922,054	70,477	
次年度繰越	870,310	909,783	39,473	


次年度繰越金	
現金	22,937
郵便局	365,818
(内 会員会議参加補助基金)	
銀行	521,028
総額	909,783

(¥227,000)

IAML日本支部の2016年会計明細書を精査した結果、適切に処理、記載されていると認めます。

2017年 5月24日

IAML日本支部会計監査



平岩 寧

## 資料③

## IAML2017年予算案

費目	2017年度予算	2016年度決算	差額	備考
前年度繰越:				
現金	22,937	23,296	-359	
ゆうちょ銀行	365,818	785,897	-420,079	
(内 会員会議参加補助基金)				¥227,000
三菱東京UFJ銀行	521,028	359,618	161,410	
(小計)	909,783	1,168,811	-259,028	
収入:				
未収会費(2016年以前)				
個人	18,000	150,000	-132,000	
団体	0	14,000	-14,000	
会費2017年				
個人	0	192,000	-192,000	
団体	0	252,000	-252,000	
会費2018年				
個人	336,000	0	336,000	個人56
団体	266,000	0	266,000	団体19
雑収入	0	0	0	
利息	2	26	-24	
(小計)	620,002	608,026	11,976	
会員サポート・支部活動支援基金	50,000	55,000	-5,000	
(収入小計)	670,002	663,026	6,976	
収入総額	1,579,785	1,831,837	-252,052	
支出:				
本部宛会費送金	360,382	382,531	-22,149	3044.80EURO/1EURO=118.36YEN
予備費	50,000	20,000	30,000	
経常経費:				
RILM分担金	80,000	80,000	0	
大会代表派遣費	100,000	100,000	0	
ニュース・レター	60,000	54,872	5,128	¥20,000×3回
会議費、例会費	40,000	12,620	27,380	
交通費	100,000	24,050	75,950	
通信費	90,000	60,827	29,173	
消耗品費	20,000	33,592	-13,592	
雑費	5,000	3,796	1,204	
アルバイト代	10,000	0	10,000	
HP運営費	25,000	49,766	-24,766	
(経常経費小計)	530,000	419,523	110,477	
会員会議参加補助基金	100,000	100,000	0	
支出総額	1,040,382	922,054	118,328	
次年度繰越	539,403	909,783	-370,380	
(内 会員会議参加補助基金)	127,000	227,000	-100,000	

## 「若手・中堅検討会」活動報告

久保 絵里麻

「若手・中堅検討会」（仮称）は、今年の第 60 回例会において提案したいくつかの企画（Newsletter No.58 参照）に取り組んでいる。そのひとつが「Facebook の利用」で、2017 年 4 月より Facebook グループ「音楽図書館」を立ち上げ、IAML 関連のみならず、国内外の音楽図書館及び音楽資料に関わる様々な情報をシェアしている。当面は、国内に向けて広く一般に IAML の意義と日本支部の役割を周知しつつ、且つ情報源として活用されることを目指して内容の充実を図っていくが、将来的には国内外を問わず様々な立場から音楽資料を主題としたフォーラムの場として利用されることも視野に入れている。現在は試験運用中のため非公開グループとして登録しているが、次回例会後の公開を目指して準備中である。

（くぼ えりあ）

## 「若手・中堅検討会」の 今後の活動について

支部長 伊東 辰彦

2016 年 1 月 30 日より正式に活動が始まった若手の IAML 関係者による会合は、前期役員金井喜一郎氏のサポートを得て堅実な展開を見せ、その活動状況については、役員会において随時報告を受けて来た。2016 年 6 月 18 日の例会でのパネルディスカッション「IAML 日本支部のこれからを考える～『若手・中堅による検討会』からの提案」を経て、特に、2016 年 11 月 6 日の役員会において、この会合を IAML 日本支部の正式なワーキング・グループとして

位置付ける方向が確認され、今期の新役員会においても、その方向性が再度確認されている。

2017 年 7 月 24 日の役員会においては、全会一致でこの会の将来性が支持され、今後は支部長及び役員会の指導・監督の下で、IAML 日本支部の正式な活動として承認する準備に入る事になった。この会の正式活動の一員として積極的に関わって来られた久保絵里麻さんが新役員として選出されたことは、この会の活動の重要性が認識されたものと理解している。次の例会（11 月 25 日）においては、IAML 日本支部の国際的な活動を視野に入れた、若手からの活動報告と今後の展望についての報告がされることになっており、会員の皆さんからの有益なご意見、ご提案をお願いする次第である。

（いとう たつひこ）

---

## 訃報 上法 茂氏

藤堂 雍子

6 月総会直前に退会された上法茂氏のお見舞いに、と荒川前支部長からリガでお見舞いの CD（ラトヴィア国立合唱団、Maris Sirmas 指揮）が私に託されました。帰国後すぐ、入院先に近いで自宅をお訪ねしました。脳梗塞で倒れられて以来 17 年を経ていました。1951 年慶応義塾大学に米国から導入された図書館・情報学科の一期生で、NHK 音楽資料室で勤務され、職場の上司である小川昂氏（後に NHK 交響楽団事務長、民音音楽資料館常勤顧問）とも家族ぐるみのお付き合いがあったことをご長男小川治之氏から伺いました。何より IAML 国際会議に出席した日本人第 1 号（1967 年ザルツブルク）で、日本支部創設に尽力されたお一人です。

専ら IASA (International Association of Sound and Audiovisual Archives) の活動を通じて BBC をはじめとした放送局図書館との交流がございました。IASA は、現在は IAML と袂を分かち、別組織を形成していますが、両方に出席している会員も少なからずいます。上法氏も、エストニアのタリン (2003)、そしてオスロ (2004) 以降、ワルシャワ (2005)、ナポリ (2008) には夫人を伴われ、車椅子で参加されていました。

お見舞いからわずか1週間余の7月6日に誤嚥性肺炎で逝去されました。同11日桐ヶ谷斎場でご葬儀が営まれ、献花させていただきました。訃報をお知らせくださった岩崎淑夫人から、件のCDは二人で聴きましたとお言葉をいただきました。ラトヴィアの作品が多く収録されていました。因みに、氏は、北欧音楽協会の世話役も永年務めておられました。享年89才、心よりご冥福をお祈り申し上げます。(慶応卒業年次については、ご同業の小川治之氏に同学科名簿を確認していただきました。重ねて御礼申し上げます)。

(とうとう やすこ)



IAML1988年東京大会にて、福島和夫氏と上法氏(右)



#### 新役員体制

2017年度からの役員の体制は以下の通りです。どうぞよろしくごお願い申し上げます。

支部長・例会 伊東 辰彦

副支部長・ニューズレター 伊藤 真理

事務局長 藤堂 雍子

会計 宮崎 晴代

例会 岸本 宏子 久保 絵里麻 星野 宏美

支部ウェブサイト 田島 克実 柳澤 健太郎

#### IAML 日本支部 秋の例会

今回は、「若手・中堅検討会」企画による開催です。会員以外の方も参加可能です。お誘い合わせの上、ぜひご参加下さい。例会終了後に、情報交換会を予定しています。

テーマ 「音楽情報におけるカレントアウェアネスの試み」

日時 11月25日(土) 14:00～16:00

会場 東京音楽大学付属図書館5階会議室

#### IAML 国際大会

2017年は6月18日～22日にリガ(ラトヴィア)で開催され、その様子は次号のニューズレターでご報告する予定です。

次年度はライプツィヒ(ドイツ)で開催です。すでに本部ウェブサイトにて当大会に関する情報が掲載されています(<http://www.iaml.info/congresses/2018-leipzig>)。また発表の募集も始まっています。研究発表(質疑応答込み30分)とポスター発表の方法があり、締め切りは11月17日(金)です。発表に関するガイドラインなどの詳細については、上記2018年大会のサイトをご参照ください。なお、今後の国際

大会の予定は次の通りです。

2019 年 クラコフ (ポーランド) 7/14 ~ 19  
2020 年 未定  
2021 年 ステレンボッシュ (南アフリカ)  
日程未定

#### 音楽図書館協議会 秋の研修会

今年も図書館総合展にあわせて開催です。

テーマ 「音楽図書館と著作権」

(講師 福井健策氏 骨董通り法律事務所弁護士)

日 時 11 月 9 日 (木) 10:00 ~ 12:00

会 場 パシフィコ横浜 第 9 会館 E 204

#### 武蔵野音大江古田新キャンパスに図書館完成

江古田キャンパスの大規模な建て替えに伴い、図書館も改築されました。新図書館は、総合受付カウンターが設置されたメインフロア (1 階)、豊富な AV 資料を中心としたサイレントフロア (2 階)、プラザに面したオープンな雰囲気のラーニングコモンズとグループ学修室によるアクティブフロア (B1 階)、というキャンパスの特徴を活かした 3 層構成となっています。「江古田新キャンパスプロジェクト」<http://musaon.jp/others/> より抜粋。同ページではパノラマ写真で、館内の様子を見ることができます。

8 月 31 日に音楽図書館協議会により見学会が開催され、当会員からも参加がありました。

#### お知らせ

IAML 日本支部と RILM 日本支部が合同で、2018 年に下記の要領で国際会議を開催することになりました。ニューヨークから、バーバラ・マッケンジー氏 (前 IAML

会長)、ズドラヴコ・ブラゼコヴィッチ氏をお招きします。また、アジア各国からも IAML 及び RILM の関係者にお集まり頂き、アジアにおける現状の共有と、今後の方向性について意見交換したいと思います。なお、会議は全て英語で行われます。皆さんの積極的なご参加をお待ちしています。

テーマ 「アジアの音楽情報と国際協力の推進: 音楽資料の調査と音楽図書館の連携」  
Music Information in Asia and Advancement of International Collaboration: Searching the Music Source and Connecting the Music Libraries

主催 国際音楽資料情報協会 (IAML) 日本支部

共催 国際音楽文献目録委員会 (RILM) 日本支部

場所 立教大学池袋キャンパス (予定)

日時 2018 年 6 月 16 日 (土)

14:00-18:00 基調講演、シンポジウム

18:15-20:00 情報交換会

(なお、当日 13 時 ~ 14 時は IAML 日本支部年次総会)

#### 新会員

板津昇龍氏、野川夢美氏

(編集部)

Newsletter — 国際音楽資料情報協会日本支部  
第 61 号

2017 年 10 月 31 日発行

国際音楽資料情報協会 (IAML) 日本支部  
〒171-8540 東京都豊島区南池袋 3-4-5  
東京音楽大学付属図書館内  
<http://www.iaml.jp>